

ノンノス『ディオニューソス譚』第七歌 翻訳と解題

石見衣久子

Abstract

Dionysiaca was a large-scale epic written by Nonnos of Panopolis in Egypt in the fifth century AD. As the title shows, the main character is Dionysos, who is one of the gods in the ancient Greek and Roman worlds. This Greek epic consists of forty-eight books and is over twenty thousand verses in hexameter, which is a meter used for epics. Therefore, considering when it was composed and its scale, *Dionysiaca* seems to be the last, and the most unique piece of work about Dionysos. This article treats Book 7 which is a part of the stories about Dionysos' birth. I translated and annotated v. 106-281 from Greek into Japanese.

キーワード…… 『ディオニューソス譚』 第七歌 デイオニューソスの誕生

はじめに デイオニューソスの誕生と第七歌

『ディオニューソス譚』は、後五世紀にエジプトのパノポリス出身のノンノスが著した長編叙事詩である。そのタイトルが示す通り、ディオニューソス 古代ギリシアの多神教世界の一角をなし、また後のローマ時代においても広く認識されていた神格を主人公としている。この叙事詩は、前四八歌、二万行を越える韻文から成り立っており、ディオニューソスに関する様々な物語を過剰とも言えるほどに織り込んでいる。こうしたことから見て、長さの点でも、内容の点でも、この作品は他に例のないものであると言える。更にこの後五世紀という時代から見て、古代を通じて受け継がれてきたディオニューソスを語る、最後の作品であるとも言えるのである。

二つのディオニューソス神話

(1)ゼウスとペルセフォネーからの誕生

物語はディオニューソスの誕生以前から始まる。そしてこの神の誕生と成長を経て、オリュンポス受け入れの条件としてインド遠征の試練がゼウスにより課される。長きに渡る遠征と勝利の後、ギリシア各地に凱旋の到来を果たし、最後にオリュンポスの内に自らの座を獲得する。ごく概略的に示せば、これが『ディオニューソス譚』のあらすじである¹⁾。本稿で扱う第七歌

は、ディオニューソスの誕生に纏わる諸話の一部を成している。第六歌では先ず、一般にザグレウスの名の下に伝わるディオニューソスの誕生と死が語られる²⁾。ディオニューソスの出自については、古代ギリシア以来二つの系統がある。その一つがゼウスを父とし、デーメーテルの娘ペルセフォネーを母とするものである。ゼウスは蛇の姿でペルセフォネーと交わり、生まれてくる子を自らの後を継ぐ王として即位させることにする。しかしこの子供は長く王位に留まることは出来なかった。ゼウスの妃であるヘーラーの奸計により、ティーターンたちに唆され、ばらばらに引き裂かれて殺害されたからである。その事実を知ったゼウスは怒り、ティーターンたちを雷で打って冥界の遙か奥底にあるタルタロスに閉じ込める。その後ディオニューソスは完全な姿で復活することになる³⁾。

ノンノスはこの物語を利用し、ザグレウスを最初のディオニューソスと位置付けている。『ディオニューソス譚』では、ティーターンたちが鏡を使ってディオニューソスを誘惑し、身の危険に気づいた彼は様々なものに変身して自分を守ろうとする。しかしその抵抗も空しく、命を奪われ、ナイフでばらばらにされるのである。それを知ったゼウスは、ティーターンたちの母である大地を雷で打ち、殺害者たちをタルタロスへ閉じ込める。それでも怒りは収まらず、方々の地を雷で燃え上がらせた。やがて、あらゆる河川や泉の祖とも言える神オーケアノスが怒りを和らげるよう懇願し、ゼウスはそれを受け入れる。今度は焼けただれた地上を洗い流すために大規模な洪水を引き起こす。そうして後に、人間が都市を建設し再び文明化の道を辿る様子が語られて第六歌は終わる。

続く第七歌において、その冒頭で、時の擬人神アイオンはゼウスに、悲しみに沈む人間たちの苦痛を打ち払うために、ディオニューソスを誕生させるよう懇願する。通常の暮らしが出来るまでになってもなお、人間は悲嘆に暮れていた。そしてディオニューソスはまだその生を復活させていなかったのである。ゼウスはアイオンに応えて、人間を癒すための葡萄酒と共に、そのもたらし手としてディオニューソスをこの世に送り出すことを誓う。ゼウスの返答の言葉は、ディオニューソスが如何なる者であるか、また如何なる役割を持っているかを示しており、この作品の主題の一つでもある⁴⁾。また、ここで登場するのが、もう一つのディオニューソスの出自に関わる物語である。

(2)ゼウスとセメレーからの誕生

アイオンとゼウスのやりとりの後、エロースはゼウスと結ばれる女性たちの名を刻んだ矢を用意する。その内の一つがセメレーへの愛であり、彼女からディオニューソスが誕生することになる。セメレーはテーバイの祖であるカドモスの娘の一人で、この人間の女性とゼウスを両親とする物語もまた　むしろより一般に　よく知られていたものである。それについても大凡の筋を示そう⁵⁾。ゼウスは人間の男の姿でセメレーのもとに通っていた。それに気付いたヘーラーは、彼女の乳母に姿を変えてセメレーを唆した。即ち、ゼウスに何でも願いを一つ

叶えるという約束を取り付けてから、ヘーラーのもとに行く時の姿で自分の所に来ることを頼むよう仕向けたのである。セメレーの願いに応じて、ゼウスは雷光を伴って現れ、彼女はその雷に打たれて息絶えてしまう。彼女の胎内より父神は未だ月足らずの胎児を救い出し、自らの太腿に縫い込める。これがディオニューソスであり、月満ちて彼はゼウスより誕生を果たすのだ。

ディオニューソス前史となる最初の数巻で、カドモス及び、彼の祖先にあたるイーオー、彼の姉妹でゼウスに略奪され、そのために彼が探し求めるところとなるエウローペー、そして彼の子孫に関する諸物語を語っていることから、ノンノスはこの作品で、テーパイを舞台とする神話群におけるディオニューソスの誕生神話を採用している。そうしてザグレウスの誕生と死の神話を最初のディオニューソスの物語として、テーパイにおけるこの神の誕生神話と結び付けているのだ。セメレーにより生まれるディオニューソスが、主人公として今後の物語を展開させてゆくことになる。第七歌はゼウスとセメレーの結合と、ディオニューソスの誕生、及びそれによりセメレーに与えられる名誉についてのゼウスの予言で終わり、実際の誕生は第八歌から第九歌にかけて語られる。

1 第七歌翻訳（一〇六 - 二八一行）

本稿では第七歌の内、一〇六 - 二八一行を翻訳し、注釈を付ける(次節)。アイオーンとゼウスのやりとりが終わった丁度その後からの話となる⁶⁾。また二八二行から第七歌の最後にかけては、ゼウスとセメレーの婚礼に当たり、従って中間に相当するこの部分は、ゼウスがどのようにしてセメレーと出逢うかを(或いは見出すという方が良いかも知れないが)物語っている。なおテキスト中の()は、翻訳にあたり意味を補った箇所である。

父はそのように語った。運命の女神たちも同意した。その言葉に関して
来たるべきことを伝える者である、良き足の季節の女神たちはくしゃみをした。
それをこのように語って彼らは分散した、一方はハルモニアーの
家を訪れ、もう一方はヘーラーの色取り取りの神殿を訪れて。

さて賢く自ら学んだ、アイオーン*を放牧する者であるエロースは 一一〇
最初に生まれたカオスの暗い門を叩いて
神のために作られた矢筒を持って行った、ただその中にだけ
人間たちの婚礼の次から次へと起こる欲求に対して
ゼウスのために火に養われた十二本の矢が取って置かれていた。
そして彼は黄金の言葉を順番通りに、それぞれの
恋に打たれた籬の背の真ん中に刻み込んでいた。

「最初の矢は、^ク^ロ^ニ^スの息子を牛の眼をしたイーオーの新婚の床に連れて行く。*」

「二番目の矢は、略奪者である牡牛のためにエウローペーに求婚する。*」

「三番目の矢は、ブルトーの婚礼にオリュポスの君主を連れて行く。*」

「四番目の矢は、ダナエーのところへ黄金の夫を呼び寄せる。*」

一二〇

「五番目の矢は、セメレーに燃え盛る炎の婚礼を用意する。」

「六番目の矢は、アイギーナに天空の君主である鷲をもたらす。*」

「七番目の矢は、アンティオペーを偽りのサテュロスに結び付ける。*」

「八番目の矢は、心を持つ白鳥を肌の露わなレーダーへと連れて行く。*」

「九番目の矢は、馬の床をペッライピアのディーアに運ぶ。*」

「十番目の矢によって、アルクメーネーの床を共にする者が三日の間誘惑される。*」

「十一番目の矢が、ラーオダメイアの婚礼を続けてもたらす。*」

「十二番目の矢は、オリュピアスの三重に巻かれた夫を引き寄せる。*」

エロースが全てを一つ一つ触って見た時、

彼は他の火の鏃を持つ矢を放っておいて、

一三〇

手に五番目の矢を取り上げ 火のように燃える弓の弦に番えた

木蔦を翼ある矢の鏃の上に付けて、

葡萄に満ちた神にぴったりの花冠となるように*、

またネクタルの^{クラテール}混酒器の液体に矢全体を沈めて

バックス*がネクタルのような果実*を成長させる為に。

ゼウスの住まいへとエロースが急いで跳んで行った一方、

薔薇色の夜明けと共に走るセメレーは

銀製の鞭の音を町中に響かせた

驟馬を追い立てながら そして立ち昇る埃の一番上を

良き輻をした四輪車の真っ直ぐで細い溝が跡を付けた。

一四〇

彼女は^{ヒュムノス}眠りの忘却の翼を眼から摘み取り

彷徨う魂を 神託を謎のようにして告げる、反響する

夢へと導き、そして生まれたての木蔦の実を付け*

美しい葉を付けた緑がかった木を庭の中で見たと思った、

未だ熟さぬ葡萄の膨らんだ果実*で重くなった、

^ク^ロ^ニ^スの息子の樹木を育てる露に降られた木を。

突然天空から天の焰が落ちると、

それは木全体を倒したが、若い果実は襲わなかった*。

しかし翼を広げた鳥が彷徨うように来てそれを攫うと

それは半分しかできておらず、完全な誕生を欠いていたのだが、

一五〇

クロノスの息子に差し出した。父はそれを喜ぶ胸に捕まえて受け入れ、腿に縫い合わせた。果実の代わりに角のある姿によって形作られた牡牛の姿をした男*が完全な姿を取って父の股の上に現われた。

セメレーは樹であった。娘はひどく身震いをしながら寝床から跳び上がり 父を怯えさせた美しい葉の付いた夢の中での光を運ぶ煙のことを語って。そしてセメレーの火で燃える樹のことを聞いて 王カドモスは身震いした。カリクローの息子*で神のことを語る者を早朝に呼び寄せると、彼は娘の煙の夢を述べた。

一六〇

それからテイレシアースの神聖なる言葉を聞いて父は娘を慣れ親しんだアテーナーの神殿へと送り出した。そうして雷霆を放つゼウスに犠牲を捧げたリュアイオス*の似姿である同じ様な角が生えている牡牛を、そしてこれから生えてくる果実の房を刈り取ってしまう敵である牡山羊を。

それから彼女は町の外へと歩み出た、雷光を支配するゼウスに対して祭壇に火を付けようと。犠牲の傍に立つと血で胸を濡らし、娘は流れた血に塗れることになった。そして多量の血の筋が編んだ髪を濡らし、牛の滴り落ちる血で衣服は朱に染まった。

一七〇

そして真っ直ぐに走って 葦の生い茂った牧草地へと傍らにあるアソーポス河の父祖の地(を流れる)水を求めて行った煌めく服を着た乙女は、多くの滴る雫で染みになって血で濡れてしまった衣服を 流れて洗い清めるために。乙女は次々と恐怖を感じ、傍らの河岸の上から悪を防ぐ河の東の岸の傍へ(行って)流れの中、風の中へと夢の恐ろしさを振り払った。彼女は神々の援けなしに河を求めて行ったのではなかった、彼女をあの河の河口へと予言を下す季節^{ホー}の女神たち^ラが導いたのだ。

アソーポスの河で沐浴しているセメレーを見ると 空に彷徨うエリーニユースは嘲笑した。クロノス^オの息子^ンが共同の運命において両方を*燃え盛る雷で打とうとするだろうというのを思い浮かべて。

一八〇

そこで彼女は体を洗い清めていた。従者たちと共に

ノンノス『ディオニューソス譚』第七歌（石見）

裸の娘は手を櫂にして水の中で素早く動いていた。
そして巧みな技で濡れないように頭を持ち上げた
波の上に懸命に伸ばして、髪まで
水に浸して胸を流れに拵げ
足を代わる代わるに出して水を後ろへと押しのけた。

しかし彼女はゼウスの全てをみそなわす眼から逃れられなかった。娘の周りに 一九〇
高く輝いて彼は視覚の限りない輪を巡らせた*。

命の守り手である弓を空中に引き絞りつつ
容赦しない弓の射手であるエロースは(セメレーを)
じっと見詰める父の眼前に立った。花で飾られた矢の上で
弦は輝いた。後方に弓が引かれて
巧みな飛道具はエウアイ*の歓声の響きを立てた。

父ゼウスはそれほど大きな的であった。取るに足りない
エロースに彼は頭を下げたのだった。そして星の通った跡のように
婚礼の笛の音を立てて揺れるエロースの矢が
ゼウスの心臓へとやって来たが、思慮ある振動によって脇へ逸れた、 二〇〇
鏃の先で腿の襷を引っ掻き*、

来たる出産の先触れとなったのだ。それからクロナスの息子は
落ち着かない眼を婚礼の運命へと導くものとして持ちながら
欲望の帯*で乙女の愛へと鞭打たれた。

セメレーを見て彼はあのいた、河岸の傍に(いるのは)
二度目のエウローペーではないかと考えた。心の中で
再びフェニキア*での欲望を抱いてそれに苦しんだ。というのも彼女は
同様の美しさを持っていたのだ、絶えず彼女自身の顔に
父の姉妹*と生まれを同じくする輝きが煌めいていた。

父ゼウスは巧みにも自らの姿を変えた、 二一〇
そうしてセメレーの愛へと然るべき時の前に驚として彼は飛んだ*
娘の父親である河のアーソーポスの上に、
丁度アイギーナの良き翼をもった婚礼の先触れとして
鳥の視力のように敏捷な眼をして(飛んだのだ)。

空を後にすると、近くにある河岸の傍らで
美しい髪をした娘の裸の姿を測るようにして見た。
というのも彼は遠くから見るのを望んだのではなく、近くに現われて
乙女の真白い身体全体を見詰めたいと欲したからである、

何故ならば斯くも限りなく並外れた大きい眼、
 全宇宙をよく見るものである眼を至る所に神は送っても、 二二〇
 十分に一人の未だ結婚せぬ娘を見たとは思わなかったからである。
 そして薔薇色をした手足で黒い水は赤くなった。
 美しい河の流れは、その美しさに輝く
 牧草地となった。乙女を見詰めて
 髪を束ねるヴェールを付けていない河のニンフが驚いて声を上げた*。
 「いかなるクロノスが以前のキュプリスの後に、婚姻を奪う鎌で*
 父の男根を切ったのか、もう一度心を持った泡が
 自発的な誕生へ形を与えられた水を導き
 より若い海のアフロディーテを産む陣痛に苦しむようにと？
 河が海に続いて同じ様に子供を産むことを競おうとして 二三〇
 単独で孕む波の 子を産む渦の筋を巻きながら
 別のキュプリスを海に負けないように産んだのではあるまい？
 ムーサたちの誰か一人が私の父の水へと*
 隣のヘリコーン山から入ってきたのではないだろう？ 誰にペーガソスの泉の
 蜜を滴らせる程に甘美な馬の蹄から生じた水を残して去ったのか、
 或いはオルメイオスの流れを(残して)？ 川床に手足を伸ばしている
 河の中にいる銀色の足をした乙女を私は見詰める。
 私は信じるべきなのか、ラトモス山の寝床の*
 眠らない羊飼いであるエンデュミオンの寝所へと行こうとして
 アーオニアの河口でセレーネーが沐浴していると？ 二四〇
 もし彼女が愛らしい牧者のために身体を洗い清めるならば
 オーケアノスの流れの後でアーソーポスはどのように必要なのか？
 またもし天上的な雪のように白い姿を彼女が持ちたいとしても
 月に相当するどのようなしを持つというのか？ というのも、言うことを利かぬ
 驃馬の鞆帯と銀の車輪をした四輪車が
 岸に居合わせている、幅のある革帯で驃馬たちを
 鞆に繋ぐことを知らなかったのだ、牛の御者であるセレーネーは。
 もし天上の何かしらの女神が来たのであれば 乙女の*
 穏やかな眼の輝く煌めきを私は見ているのだ
 おそらくテイレシアースとの昔の争いの後 二五〇
 外衣を脱ぎ捨てて 輝く眼のアテーナーが沐浴したのだ。
 薔薇色の腕をした娘は神のような姿をしている。

もし妊娠したことを誇りに思っている地上の子宮が彼女を産んだならば、*

彼女はクロノスの息子の天上の寢床に相応しいだろう。」

そのようなことを波の中で水面下の言葉で彼女は言った。

ゼウスは欲望の火の先のように尖った刺激に唆されて
泳ぐ娘の薔薇色の肌をした指をじっと見回した。

定まることのない視覚の彷徨う輪をぐるぐると回していた*、

一方では薔薇色の顔の煌めきを見詰め

他方では牛の眼をした光を、またある時には風に靡く

二六〇

長い髪を見詰めて。髪が脇に寄せられて

覆われていない娘の露わになった首筋を盗み見た。

それよりも多く神は胸を見た、クロノスの息子に対し露わな胸は

身構えていたのだった エロースたちの矢を*射掛けるものは。

身体全体を彼は見渡した。唯一見てはならない

陰部の秘儀を恥じ入る眼で見過ごした。

そして空高くにいるゼウスの彷徨う心は忍び寄って

泳いでいるセメレーの傍らで一緒に泳いだ。魅惑された

(恋愛に)よく慣れた心に 甘美な狂気に満ちた煌めきを受け取ると

父は子に屈した。最も弱い矢で

二七〇

小さなエロースは雷の射手に火を付けた。

そして雨の洪水も、雷光も役には立たなかった

燃え上がる焔の所有者には*。斯くも偉大な天の

火炎それ自体は、戦に向かないパファイア-*の小さな火に

負けたのだ。そして裸のエロースは山羊の皮*に

ケストス アイギス 飾り帯*は盾に抗った。愛を生み出す矢で

雷鳴の響きを轟かせる轟音は奴隷となった。

そしてセメレーの欲望という心を魅了する刺激に彼は動かされて

驚嘆の心を持った というのは愛は愛情のこもった驚きの隣人だからである。

そして蒼穹へと策略を巡らす 高みにあって支配するゼウスは苦勞して昇った

二八〇

取り戻されるべき顔の神々しい形を配慮して*。

2 注釈

テキスト中で*印のあるところに関し、解説していく⁷⁾。漢数字は行数を示す。

- 一一〇：ここで出てくるアイオーンは、ゼウスに懇願した神のアイオーンと言うよりは、単に時間を指している可能性が高い。
- 一一七：クロノスの息子 ゼウスのことを指す。
 イーオー アルゴスのヘーラーの女祭司であった人物。ゼウスが彼女に恋をし、ヘーラーの嫉妬を避けるため彼女を牝牛に変じた。しかしヘーラーはそれに気づき、牝牛を引き取って、幾つもの眼を持つとされる怪物アルゴスに見張らせる。ゼウスの命令でヘルメースが彼女を救い出すも、ヘーラーは蛇を使って執拗に責め立て、イーオーをエジプトまで彷徨させた。その地で彼女はゼウスとの子供エパポスを産む。カドモスとエウローペーはエパポスの曾孫に当たる⁸⁾。
- 一一八：エウローペー カドモスの姉妹。ゼウスは牡牛となって、海岸で侍女たちと遊ぶ彼女を背に乗せ、そのままクレタ島まで泳いで行った。一方エウローペーの父親であるアゲーノールは、娘の捜索に息子たちを送り出し、見つけ出すまでは帰国せぬようにと言った。息子の一人であるカドモスは母親と共に放浪し、彼女の死後デルフォイで神託を仰いだ。そこで、エウローペーの捜索は止め牝牛を道案内にし、その牛が歩くのをやめたところに都市を建設するようにと神託が下った。カドモスはそれに従って都市を建てたが、それが後にテーバイとなる⁹⁾。
- 一一九：プルートー 彼女によりタンタロスが生まれた。彼は神々の食べ物と飲み物であるアンブロシアーとネクターを盗んで人間に与え、また自分の息子を料理して神々をもてなしたという。そのような不遜な行いのため、彼は罰を受けることとなる。一般的なのは次のようなものである。即ち、冥界の最深部にあるタルタロスで、彼は池の中に立ち、水は溢れるほどにある。しかし喉が渇いて水を飲もうとすると、水位がどんどん下がり飲むことが出来ない。また頭上にはたわわな実をつけた枝があるが、空腹を癒そうと手を伸ばすと枝は遠ざかり、食べることが出来ない。永劫に渇きと飢えに苦しむ、というものである¹⁰⁾。『ディオニューソス譚』では、罰としてさらに空を彷徨っていたともされ、これは他に例のないものである。
- 一二〇：ダナーエ アルゴスの英雄ペルセウスの母。彼女の父親は、娘の息子に殺されるという神託を受け、彼女を青銅製の部屋に幽閉したが、ゼウスは黄金の雨に身を変えて彼女と交わり、ペルセウスを設けた¹¹⁾。『ディオニューソス譚』では、彼はとりわけ第四七歌において、ディオニューソスの競争相手、一時的には敵対者として登場する。
- 一二二：アイギーナ 後にセメレーが水浴に行くことになるアーソーポス河の娘。ゼウスは驚の姿を取って彼女を奪い去った。この二人の間に、『イーリアス』の主人公であるアキレウスの祖父アイアコスが生まれる¹²⁾。なおこのアイアコスは、当叙事詩のディオニューソスのインド遠征の中で、インドのヒュダスペース河を渡る際に多くの敵を打ち倒す活躍を見せる。

- 一二三：アンティオペー カドモスが倒した竜の牙から生まれたスパルタイの一人、クトニオスの息子ニュクテウスの娘とも、アーソーボス河の娘とも言われる。ゼウスはサテュロスの姿で彼女に近づき、交わった。ゼウスとの間に双生児アンピーオンとゼートスを設ける。彼らもテーバイに関係のある人物たちで、彼らがテーバイの七つの門を持つ城壁の建設に携わった¹³⁾。
- 一二四：レーダー スパルタ王家の一員であるテュンダレオスの妻。ゼウスは白鳥に姿を変えて彼女と結び付いた。彼女とゼウスの子供たちは、「ディオスクーロイ」即ち「ゼウスの息子たち」と呼ばれる双生児カストールとポリュテウケースである。一方テュンダレオスを父として(ゼウスを父とする説もある)トロイア戦争の原因となるヘレーネーと、その際ギリシアの総大将であるアガ멤ノーンの妻となるクリュタイムネーストラーが生まれる¹⁴⁾。
- 一二五：ディーア ゼウスは牡馬に身を変えて彼女と結ばれ、テッサリアのラピテース族の王で、アテナイの英雄テーセウスと友情を交わすペイリトオスをゼウスにより産む¹⁵⁾。
- 一二六：アルクメーネー ゼウスは夜の長さを通常の三倍、即ち三日分に伸ばし、彼女の夫がいない間に彼の姿を借りて交わった。その息子がヘーラクレスである¹⁶⁾。この英雄は『ディオニューソス譚』にも幾度か登場する。
- 一二七：ラーオダメイア ホメーロスによれば(『イーリアス』第六歌一九八 - 一九九)、トロイア戦争において、トロイア方で勇戦したサルペードーンの母親となっている¹⁷⁾。
- 一二八：オリュンピアス アレクサンドロスの母。ゼウスと人間の女たちとの婚礼のこのカタログの中で、唯一の歴史的人物である。アレクサンドロスはアンモーンの神託所(アンモーンはエジプトの神で、ゼウスと同一視されていた)で、自分はアンモーン(=ゼウス)の息子であると告げられたという。また母のオリュンピアスはディオニューソスの秘儀に入信しており、蛇を懐かせていた。彼女が蛇と共に寝ていた、或いは蛇の姿をした神(即ちアンモーン=ゼウス)と彼女が交わった等の言い伝えもあり、そうした諸話から採ったものと思われる¹⁸⁾。
- 一三三：解釈の仕方に疑問が残る個所。「葡萄に満ちた神の冠がびったりとするように」と読むことも出来る。
- 一三五：バッコス ディオニューソスの異名の一つ。
ネクターのような果実 葡萄酒のことを指す。ネクターが不死なる神々に相応しい飲み物である一方、人間にとって相応しい飲み物が葡萄から成る葡萄酒となる。ディオニューソスにより人間にもたらされることが、アイオーンの懇願に応えるゼウスの言葉で語られる(七三 - 一〇五)。
- 一四三 - 一五五：ディオニューソスのセメレーによる不完全な誕生と、ゼウスによる完全なる誕生の予言を、セメレーが夢で見る。「未だ熟さぬ葡萄の膨らんだ果実」(一四五)、

そして天の焰即ち雷によっても傷付かなかった「若い果実」(一四八)はディオニューソスを指していよう。一方倒された木(一四八)は、一五五行目で語られているようにセメレーである。ゼウスからの誕生を、腿から現れる「牡牛の姿をした男」(一五三)と表現しているが、ディオニューソスが牡牛或いは牡牛の角を持った姿で描写されることは、ノンノス以前からよく見られるものである。

- 一五九：二行後に出てくるテイレシアースのことを指す。テイレシアースは盲目の予言者で、彼については二四八 - 二五一の所で触れる。
- 一六四：ディオニューソスの異名の一つ。
- 一八二 - 一八三：セメレーはゼウスの雷によって急逝し、アーソーポスもまた、いなくなったアイギーナを探しに行った際、コリントスの王シーシュポスからゼウスのアイギーナ略奪のことを知り、ゼウスを訪れたところ雷に打たれるのである¹⁹⁾。
- 一九一：「視覚」についてイメージの掴みにくい箇所。
- 一九六：このエウアイヤ、他にエウオイ、エウホイ等といった歓声は、バッコスの祭りで叫ばれる歓喜の叫び声である。
- 二〇一：セメレーの胎内より救い出した胎児のディオニューソスを月満ちるまで縫い込むことを暗示している。
- 二〇四：欲望の帯「ケストス」は本来エロースの母アフロディーテーの持ち物である。二七六行目にも出て来るが、アフロディーテーは登場しない。エロースと混同されているのか？
- 二〇七：エウローペーが略奪された場所である。
- 二〇九：エウローペーのこと。
- 二一一 - 二一四：人間の女たちのカタログの中で、セメレーの次に挙げられているアイギーナについて、テキストにある通りゼウスは驚の姿で彼女と婚礼を挙げる。ここではセメレーをオリュンポスの高みからではなく、もっと近くで見るために、アイギーナの父アーソーポスのもとへと驚の姿で行くことが、結果として後の彼女との婚礼の先触れとなっていることを示している。
- 二二五：河のニンフが、水浴しているセメレーを、水及び水浴に関係する女神たちを引き合いに出して同定しようとする。四人の女神が以下登場する。
- 二二六 - 二三二：第一の仮定 アフロディーテー
ゼウスの父クロノスが父親の性器を鎌で切り取り、海へ投げ捨てたところ、その泡から生まれたというアフロディーテーの誕生は、ヘーシオドス『神統記』(一八八 - 一九七)で語られている。
キュプリス(二三六)はアフロディーテーの異名の一つ。
- 二三三 - 二三七：第二の仮定 ムーサたちの一人

一般に芸術活動を司る女神たちで、ゼウスとムネーモシュネー（記憶）の間に生まれ、九人とされることが多い。ヘリコーン山にいるムーサたちのエピソードも『神統記』（一 - 八）に見出せる。

二三八 - 二四七：第三の仮定 セレーネー

セレーネーは月の女神で、この女神に纏わる神話は少ないが、最も有名なものは、容貌の美しい羊飼イエンドュミオンとの恋の物語である。エンドュミオンは小アジアにあるラトモス山の洞窟で眠っているが、その眠りは彼自身が望み、女神或いはゼウスによって贈られた永遠の眠りであった。セレーネーはいつでもそこを訪れ、彼の逢瀬を楽しんだという²⁰⁾。

二四八 - 二五一：第四の仮定 アテーナー

テイレシアースは一六一行に出てくるのと同人物である。彼はスパルトイの一人、ウーダイオスの後裔エウエーレースと、アテーナーと親しいニンフ、カリクローの息子で盲目の予言者である。彼が盲目となった理由はいくつかあるが、ここではアテーナーとの物語が採られている。女神がヘリコーン山のヒポクレーネー（馬の泉）で水浴していたところ、その姿をテイレシアースは見てしまったのである。アテーナーは彼の眼に手を置き盲目にした。母親が訴えたが、視力を元通りにすることは出来ないため、代わりに予言の力を授けたのである²¹⁾。

二五二 - 二五四：河のニンフの最後のこの言葉は、セメレーとゼウスとの婚礼を暗示しているとも言える。

二五八：一九一行目と同様、視覚について分かりにくい箇所。

二六四：エロースたちの矢 この箇所のエロースは、神というよりは愛欲を抽象化したものと取れる。

二七三：ゼウスを指す。

二七四：アフロディーテーの異名の一つ。

二七五：山羊の皮は盾を作る際に使われることがある。ゼウス（及びアテーナー）の持つ盾で、次の行で出てくる「アイギス」は、通常この山羊皮で作ったものを指す。

二七六：二〇四行目にも出てきたアフロディーテーの持ち物。

二八一：地上からオリュンポスに帰るにあたり、本来の姿に戻ることを意味している。

< 注 >

- 1) 石見衣久子「ディオニューソス像の再構築へ向けて ノンノス『ディオニューソス譚』を足掛かりに」『比較宗教思想研究』第8輯、2008、6 - 8頁で、もう少し全体の詳しい構成を示している。
- 2) ディオニューソスの誕生のこの一つ目の系統は、一般にオルフェウス教が伝える神話に含まれるものである。O. ケルン編『オルフェウス教徒の断片集』、及び『オルフェウス讃歌』の名の下に収集された幾つかの讃歌で言及されている。

- 3) ゼウスとペルセフォネーより生まれたディオニューソスの即位や殺害および復活までの詳細は、伝える人物や書物等によって諸説あるため、以下に挙げる二次文献をもとに、簡潔に纏めたものを示した。
 ・ K. Kerényi, *Die Mythologie der Griechen Die Götter- und Menschheitsgeschichten*, (Deutscher Taschenbuch Verlag) München, 1966 [以下略号 *MG* で表記], pp. 198-201
 ・ 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、1960 [以下略号 *GRD* で表記]、ディオニューソス及びザグレウスの項
 この物語に限らず、ギリシア神話は元来聖典ともいえるべきものが存在しないため、地方やそれを扱う人物等により細かな差異が生ずる。従って本稿では、今後もある神話のあらすじを追う場合には、ここのように、体系的に纏められている二次文献をもとに大凡の内容を提示する。
- 4) 石見衣久子、前掲論文、6 頁及び 9 - 16 頁参照。ここに - - ○ 五行の訳と注を掲載している。
- 5) *MG* pp. 201-204 及び *GRD* セメレー、ディオニューソスの項参照。
- 6) 翻訳にあたり使用したテキストは、
 Nonnos de Panopolis, *Les Dionysiaques*, Tome (Chants -), P. Chuvin, (Budé) Paris, 1992 [以下略号 *ND* で表記] を使用し、他に
 Nonnos, *Dionysiaca*, Vol. 1 (Books 1 - 15), W. H. D. Rouse et al. (Loeb Classical Library) London, 1940, revised 1984 を参照した。
- 7) 注釈に当たり参考にしたのは、*ND* の注および *GRD*、*MG* と、
 K. Kerényi, *Die Mythologie der Griechen Die Heroen-Geschichten*, (Deutscher Taschenbuch Verlag) München, 1960 [以下略号 *MG* で表記] である。典拠については、*ND*、*MG*、*MG* が詳しく挙げているので(特に最後の二つは巻末で典拠の一覧表を付している)、ここでは割愛する。
- 8) *MG* pp. 87-90、*GRD* イーオーの項参照。
- 9) *MG* pp. 87-90、*MG* pp. 29-35、*GRD* エウローペーの項参照。
- 10) *MG* pp. 53-56、*GRD* タンタロスの項参照。
- 11) *MG* pp. 44-52、*GRD* ダナエー、ペルセウスの項参照。
- 12) *MG* pp. 67-73、*GRD* アイギーナの項参照。
- 13) *MG* pp. 36-39、*GRD* アンティオペーの項参照。
- 14) *MG* pp. 85-87、*MG* pp. 89-94、*GRD* レーダーの項参照。
- 15) *MG* pp. 169-196、*GRD* ペイリトオスの項参照。
- 16) *MG* pp. 109-113、*GRD* アルクメーネーの項参照。
- 17) *MG* pp. 67-73、*GRD* ラーオダメイアの項参照。
- 18) ブルータルコス『英雄伝』のアレクサンドロスの章を参照のこと。
- 19) アイギーナの所で挙げた箇所を参照のこと。
- 20) *MG* pp. 155-157、*GRD* エンデュミオンの項参照
- 21) *MG* pp. 76-88、*GRD* テイレシアースの項参照。

主指導教員(鈴木佳秀教授)、副指導教員(栗原隆教授・佐々木充教授)